

菊舎の上巳詩諧と「桃花源記」

Kikusha's Joshi Shikai and "The Peach Blossom Spring"

李 夢 幻

LI Menghuan

# 菊舎の上巳詩諧と「桃花源記」

李 夢 幻\*

はじめに

田上菊舎（宝暦三年・一七五三〜文政九年・一八二六）は江戸後期の尼僧俳人であり、また、和歌、漢詩、画、茶道、書道、七弦琴などの諸芸をもよくした。中でも、漢詩については、彼女六十歳の文化九年（一八二二）、生前唯一の版本として出された自選の作品集『手折菊』は全四巻の後半二巻の過半数を、「詩諧」という漢詩一首の後ろに俳諧（発句）をつける詩型が占めており、漢詩は、俳諧と並んで菊舎が意を用いた形式であった。

本稿では、まず、最初の試みとして菊舎が上巳に作った詩諧<sup>一</sup>のうち、陶淵明の「桃花源記」<sup>二</sup>を踏まえたと思われるものを取り上げ、

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

<sup>一</sup> 本稿で取り上げる作品は、漢詩に俳諧の発句が付された「詩諧」以外に、発句と漢詩が同日に詠まれたものや、漢詩に和歌が付されたものもある。これらを一括して呼ぶ言葉はないため、本稿ではこれらをも含めて「詩諧」という言葉で代表させる。

<sup>二</sup> 陶淵明の「桃花源記」はもともと詩の序として存在したものである。その概略を記せば、以下のようになる。

晋の太元年間、武陵の漁師が、川沿いに沿ってふと桃の咲き誇る林に出会う。その先をさわめようとしていくと、山に小さな洞穴を発見し、舟を乗り捨てて、入口から入った。そこで桃花源（世間から隔絶した和やかな所）を発見し、そこで家々に懇ろにもてなされ、何日間滞在した。帰った時、所々印をつけ、家についたとたん、郡の長官に報告し、漁師は人を連れて印を

その撰取の仕方を分析してみたい。菊舎詩諧の引用は『田上菊舎全集』

（以下、本稿では「全集」と略称する）（和泉書院、二〇〇〇年十月）による。なお、書き下し文は稿者の判断による若干の訂正箇所がある。

① 乗捨た舟も見へけり岸の桃（傍線 李、以下同様）

（1） 三日 三日

永和三日樂銜杯 永和三日杯を銜むのを楽しみ

雨霽桃花兩岸開 雨霽れて桃花兩岸に開く

時有故人乘雅興 時に故人の雅興に乗ずる有り

風流何減右軍才 風流何ぞ減ぜん右軍の才

稿本『九国再遊墨摺山』二（全集五二四頁）

（2） 三日遊馬場氏宅 三日馬場氏宅に遊ぶ

江水映桃花 江水桃花に映じ

流觴浮不住 流觴浮かびて住まらず

醉餘筆硯遊 醉余筆硯の遊び

似忘武陵路 忘るるに似たり 武陵の路

手掛かりにもう一度桃花源へ帰ろうとすると、道に迷い、帰れなくなる。

② 帰るみちもさらに忘れて桃のけふ

稿本『都の玉ぎぬ』（全集六五二頁）

(3) 上三日樂只菅公 三日樂只菅公（たよ）に上る

紅桃 三両の樹

灼灼映翰林 灼々 翰林に映ず

更爲新詩美 更に新詩の美なるが為に

忘歸千歳心 帰るを忘る 千歳（ちとせ）の心

三千とせに咲くてふも、の花かづらかけて幾世をあふがざらめや

稿本『都のしらべ』（全集六七四頁）

(4) 三日陪平松亞相公宴 三日平松（時章）亞相公の宴に陪す

千樹天溝水頭 千樹 天 溝水の頭（ほとり）

清香時入羽觴浮 清香 時に羽觴（酒杯）に入りて浮かぶ

醉來逸興忘歸路 酔ひ来りて逸興歸路を忘る

宛是桃花源里遊 宛も是れ桃花源里の遊び

③ のぼりく雲の上みるひみなかな

稿本『都のしらべ』（全集六七四頁）

右の傍線部から分かるように、菊舎は俳諧において、「乗捨た舟」、「岸

の桃」、「帰るみちを忘れて」、漢詩において、「桃花兩岸開」、「似忘武

陵路」、「宛是桃花源里遊」という「桃花源記」のイメージをもって上

巳の風景と風流な遊びの後の感興を詠んだ。次節では、それらを具体

的に検討したい。

一 菊舎の「上巳作」におけるイメージと「桃花源記」

本節では菊舎の四首の上巳詩と「桃花源記」との関係を下以下の四つのイメージ「乗捨た舟」、「岸の桃」、「帰る路を忘れる」、「宛是桃花源里遊」に分けて指摘し、またその撰取の方法を論じる。

一・一 「乗捨た舟」と「岸の桃」

漢詩(1)と俳諧①は菊舎の寛政八年～九年（一七九六～一七九七）の稿本『九国再遊墨摺山』二に収められている。菊舎は長崎に再遊し、華音と漢詩を習いはじめたのもこの時期である。寛政九年（一七九七）上巳の日、菊舎は当時漢詩の先生の楢林公極<sup>三</sup>と宿を貸してくれる逍遙館の主である竹野木吾<sup>四</sup>と一緒に上巳を祝い、俳諧と漢詩を続けて詠んだ。その上巳吟を左に引用する。

上巳吟

盃のうかぶを桃のさかりかな 公極

瀧壺に魚も見えけり桃の花 木吾

① 乗捨た舟も見へけり岸の桃 一字（菊舎―李注）

(1) 三日 三日

永和三日樂銜杯 永和三日杯を銜むのを楽しみ

三 公極 楢林栄建。長崎在住。佐賀藩医。祖はオランダ通事。（全集「人名・寺院名注」による。以下、人名に関する注はこれによる。）  
四 木吾 竹野氏。長崎住。号逍遙館。

雨霽桃花兩岸開

雨霽れて桃花兩岸に開く

時有故人乘雅興

時に故人の雅興に乗ずる有り

風流何減右軍才

風流何ぞ減ぜん右軍の才<sup>五</sup>

一字は菊舎の号である。三人は上巳吟を題としてそれぞれ発句一句を詠んだ。そして、菊舎は「三日」、「瓊浦客中三日」二首の漢詩を作ったが、「瓊浦客中三日」は「桃花源記」と関係がないため、引用を省略する。

公極の句「盃のうかぶを桃のさかりかな」の「盃の浮かぶ」は「流觴曲水」を詠む。「流觴曲水」は上巳の風流な行事の一つとして、古来文人達に好まれ、常に詩歌に詠み込まれてきた。菊舎の漢詩(1)、(2)、(4)も同じく「流觴曲水」を詠んだものである。

上巳はもともと三月上巳の日を指したが、魏晋の後、三月三日に固定した。中国古代の風俗に、この日、水辺に出て禊を行い、酒を飲んで災厄を祓う行事があり、そこから曲水の風流韻事に発展し、それが日本にも入った。室町時代から雛祭りとして行われるようになったが、雛祭の形が定着したのは寛文年間(一六六一〜一六七三)と見られる。当初は京都が中心であったが、文化・文政年間(一八〇四〜一八三〇)に江戸に広まった。曲水流觴は上巳の日に行われた風流な行事である。もともとは秦の昭王が三月上巳に、酒を河曲に置いた時、金人が秦の前途の発展を予言して祝ったが、後に秦が諸侯の覇となつてから、

これを記念して曲水を行うようになった。晋の時代、これが風流の行事に発展し、永和九年(三五三)三月三日王羲之をはじめとする四十一人の名士の蘭亭会は王羲之の蘭亭帖によって名高い。曲がりくねって流れる水のほとりに臨んですわり、上流から盃を流し、それが流れてくるまでに作詩ができなければ、盃の酒を飲まなければならない罰酒の趣向があつたとされる。『日本書紀』顕宗天皇元年(四八五)と二年、上巳に曲水の宴を行った記事があり、菅原道真の「花時の天は酔うに似たり」の序(寛平二年(八九〇))にそれ以前にこの行事が絶えていたことが分かる。<sup>六</sup>

このように日本は古くから上巳の日曲水の宴を行っていた。江戸時代になると、上巳の行事は雛祭りとして祝うようになるが、文人の間で、「曲水の宴」も広く行われたらしい。菊舎前詩の他、文化二年(一八〇五)四月三日の高本紫溟<sup>七</sup>からの来簡に「当春は三日雨天にて、流觴も出来不申候、其後も多雨余寒などいろくさし合、今に其事これなく、近日催候はづに御ざ候。」<sup>八</sup>と書いてある。その年の上巳の日は雨だったため、流觴曲水の行事はできず、また後日に催す予定であることを菊舎に伝えている。他にも、例えば、大田南畝日記「三春行樂記」天明二年(一七八二)三月三日に「過土山沾之、作曲水宴、同菅江・嘉十・三井氏飲酒、歌妓阿加与亦至、」(土山沾之を過ぎり、曲

五 全集五二四〜五二五頁

六 鈴木棠三『日本年中行事辞典』(角川書店、一九八九年十月)、加藤友康ほか『年中行事大辞典』(吉川弘文館、二〇〇九年三月)

七 高本紫溟 名順。通稱敬藏。字子友、李順。本姓原田氏。熊本藩儒、号川觀亭。文化十年没、七六歳。

八 全集九七二頁「書簡・来簡」

水の宴を作す。菅江・嘉十・三井氏と酒を飲む。歌妓阿加与も亦た至る。<sup>九</sup>がある。

公極の句にもとる。「盃のうかぶを桃のさかりかな」は上巳の日に、曲水の宴の情景とさかりの桃の花を詠んだ。木吾の句「瀧壺に魚も見えけり桃の花」は漢籍に関係はなさそうである。菊舎の発句①「乗捨た舟も見へけり岸の桃」に詠まれた桃の花は前の二人と異なり、「岸」の桃の花に焦点を当てる。「岸の桃」「乗捨た舟」という二つのイメージは、自然に陶淵明の「桃花源記」を連想させる。左に「桃花源記」の関連部分を引用する。

晉太元中、武陵人捕魚爲業、緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、夾岸數百步、中無雜樹、芳草鮮美、落英繽紛、漁人甚異之、復前行、欲窮其林。林盡水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入。

発句①の中の「乗捨た舟」は武陵の漁師が桃花源の入り口の穴を見し、入ろうとして乗り捨てた船のことになる。下五の「岸の桃」は漁師を桃花源へ導く両岸の桃の花である。菊舎の句は、江戸時代日本の片隅の川岸に乗捨てられた舟を、時空を超えた武陵の漁師が乗り捨

九 濱田義一郎ほか編『大田南畝全集』第八卷（岩波書店、一九八六年四月）

四二頁

一〇 「桃花源記」の引用は鈴木虎雄訳注『陶淵明詩解』（平凡社、一九九一年）三五五～三五九頁による。以下同様。

てた船と見るのである。それより前に並んでいる公極の詠んだ「桃のさかり」も木吾の詠んだ「桃の花」の様子も「桃花源記」における両岸の花を描写したかのように思わせる。漁師が舟を捨てたところに「忽逢桃花林、夾岸數百步、中無雜樹、芳草鮮美、落英繽紛」という桃の花の様子が菊舎の句の「乗捨た舟」と「岸の桃」の語によって彷彿とさせる。「岸の桃」に岸の桃の咲き乱れる様子が補われて、まるで桃花源に身を置くイメージが表現される。

さて、この「上巳」に「乗捨た舟」あるいは「岸の桃」を詠んだ句は『古典俳文学大系』収録作の範囲では見当たらない。あるいは、菊舎の「桃花源記」の撰取の発想は絵画からのものではなからうか。菊舎はそれより十年前の九州行において真村芦江（一七五五～一七九五年）について画を習いはじめ、その後画賛を創作し続ける。「桃源図」において、「乗捨た舟」はよく現実世界と桃花源の境目として描かれる。呉春の「武陵桃源図巻」（寛政八年～十年作、遠山記念館蔵）<sup>二</sup>はその一例である。呉春の「武陵桃源図巻」には「乗捨た舟」が描かれている。菊舎はこのような「桃源図」の画から発想を得たのではなからうか。

続いて漢詩に移る。漢詩の起句「永和三日樂銜杯」（永和三日杯を銜むのを楽しみ）は、王羲之の「蘭亭序」における「永和九年、歳在

二 「画の道に師弟の縁をむすびしより、ひと度はめぐりあはんと十とせの春秋をこがれ暮し、漸此地へ再遊しけるに、最早此世をさり給ひしとなん、

芦江先師がなき跡をとひて、稿本『九国再遊墨摺山』二全集五〇七頁

三 <https://www.e-kinenkan.com/fayori/vol63.pdf> (2024.04.23参照)

癸丑、暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、脩禊事也」（永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり）。永和九年（三五三）蘭亭の会の曲水流觴の雅遊について記した句に因む。「銜杯」は飲酒の意味であり、杜甫の「飲中八仙歌」に「銜杯樂

聖稱避賢（杯を銜み聖を樂しみ賢を避くと称す）の句がある。承句「雨霽桃花兩岸開」は雨が止んで、兩岸に桃の花が咲いている様子を言う。

ここの「桃花兩岸開」も「桃花源記」の「忽逢桃花林、夾岸數百歩」に詠まれた「夾岸の桃花」に因む。漢詩における最初の作例は唐の王维の「桃源行」（『全唐詩』一二五）における「兩岸桃花夾去津」（兩岸の桃花去津を夾む）に遡れる。転句「時有故人乘雅興」は、時に故人が今の雅興に乗ずることになるという意味で、公極か木吾かが上記の雅宴に途中に来たことを詠んだ。「乘雅興」の語は『世説新語』における王子猷が戴安道を訪ねた話を踏まえた。<sup>二三</sup> 結句「風流何減右軍才」における「右軍」は王羲之のことを指し、菊舎ら上記の曲水の宴の風流は王羲之の蘭亭の会に比べても負けないことを詠嘆する。

二三 新釈漢文大系第七八卷『世説新語』下（明治書院、一九七八年八月）任誕第二十三、「王子猷居山陰、夜大雪。眠覺、開室、命酌酒、四望皎然。因起彷徨、詠左思招隱詩、忽憶戴安道。時戴在剡。便夜乘小船、就之、經宿方至。造門不前而返。人問其故、王曰、吾本乘興而行、興盡而返、何必見戴。」

この故事にも「船」が登場する。菊舎の「三日」詩に詠んだ「時有故人乘雅興」が『世説新語』任誕の「王子猷訪戴」の故事を踏まえたこともまた途中に来た故人（楢林公極か。当時菊舎は木吾の家に泊まっていた。）が王子猷のように船に乗ってきたことを意味すると思われる。そうだと、漢詩転句が下敷にした故事により種明かした「船」のイメージも前の菊舎の句の「乗捨た舟」と繋がりがあがるようになる。菊舎が句に詠んだ「乗捨た舟」は、公極の乗ってきて、そこに乗り捨てた船であった。

この漢詩（1）「三日」には『唐詩選』巻七に収録される唐の常建<sup>一四</sup>の「三日尋李九莊」（三日、李九が莊を尋ぬ）と重なる詩語が四つもある。

（5）三日尋李九莊 三日、李九が莊を尋ぬ

常建 常建

雨歇楊林東渡頭 雨は歇む 楊林 東渡の頭

永和三日盪輕舟 永和三日 輕舟を盪かす

故人家在桃花岸 故人家は桃花の岸に在り

直到門前溪水流 直ちに門前溪水の流れに到る<sup>一五</sup>

富士川英郎ほか編『詩集日本漢詩』（汲古書院、一九八五～一九九〇）のうち、上記を詠んだ漢詩は百首以上あるが、その中で、稿者の調べた結果によると、常建の「三日尋李九莊」を踏まえた漢詩が七首ある。以下詩集収録順に引用する。

（6）三日尋子昌莊

一四 常建 字不詳。京兆長安（陝西省西安市）の人。開元十五年（七二七）王昌齡とともに科擧に及第し、大歴年間（七六六～七七九）に盱眙の尉となる。官途に意を得ず、最後には隱居した。その詩は山水や寺觀を題材としたものが多く、叙景にすぐれる。また辺塞詩にも特色を發揮した。現存詩數五八首。『常建集』がある。一松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）一〇二頁

一五 日野龍夫校注、服部南郭『唐詩選国字解』三（平凡社、一九八二年）一八七頁

服部南郭

鳥啼花發野亭ノ西

三日重來路不<sub>レ</sub>迷<sub>ハ</sub>

處處春風桃李ノ下

何人<sub>カ</sub>已<sub>ニ</sub>是踏<sub>テ</sub>成<sub>ス</sub><sub>レ</sub>蹊<sub>ヲ</sub>

『南郭先生文集』四篇卷之三 一七

(7) 三日訪<sub>二</sub>隱者<sub>ヲ</sub>

龍草廬

積雨新晴溪水ノ東

邇<sub>ル</sub>流<sub>ニ</sub>十里訪<sub>フ</sub>仙翁<sub>ヲ</sub>

輕舟漸<sub>ク</sub>到<sub>リ</sub>洞門ノ外

家<sub>ハ</sub>鎖桃華千樹ノ紅

『艸廬集』三編卷之六 〇一〇二

(8) 三月三日幽蘭亭<sub>ニ</sub>同<sub>ク</sub>賀藩ノ女才子小淵<sub>ト</sub>賦<sub>ス</sub>二首<sub>一</sub>(其一)

龍草廬

永和三日碧桃ノ春

雨霽<sub>テ</sub>山陰韶景新<sub>ナリ</sub>

誰<sub>カ</sub>料<sub>シ</sub>蘭亭揮筆ノ興

別<sub>ニ</sub>添<sub>シ</sub>ト<sub>ハ</sub>衛氏ノ一夫人<sub>ヲ</sub>

『艸廬集』四編卷之六 〇二二一

(9) 三月三野ノ束子中至<sub>テ</sub>有<sub>レ</sub>賦<sub>ス</sub>ル<sub>ト</sub>

龍草廬

一雨新<sub>ク</sub>晴<sub>ル</sub>綠鴨ノ津

有<sub>レ</sub>人來<sub>リ</sub>訪<sub>フ</sub>艸堂ノ貧

相逢<sub>テ</sub>相侑<sub>ム</sub>桃花ノ酒

恰<sub>カ</sub>是<sub>レ</sub>永和三日ノ春

『艸廬集』五編卷之八 〇十七

(10) 三日尋<sub>二</sub>公修莊

大田南畝

碧桃花<sub>ノ</sub>羨<sub>テ</sub>鳥相求

三日ノ風光訪<sub>二</sub>舊遊<sub>一</sub>

觴咏欲<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>修禊ノ飲<sub>ヲ</sub>

柴門近<sub>ク</sub>指<sub>ス</sub>玉川ノ流

『杏園詩集』卷一 十二

(11) 上巳涉<sub>二</sub>大猪水<sub>一</sub>作懷<sub>二</sub>伊勢藤子文<sub>一</sub>

菅茶山

歸程忽<sub>及</sub>大猪水

水阻始<sub>メ</sub>通灘猶駛<sub>シ</sub>

涉夫出沒如<sub>ニ</sub>鳧鷖<sub>ノ</sub>

須臾出<sub>レ</sub>險<sub>ヲ</sub>免<sub>ニ</sub>萬死<sub>ヲ</sub>

同人建<sub>メ</sub>議<sub>ヲ</sub>賒<sub>ニ</sub>酒肴<sub>ヲ</sub>

相慶<sub>シ</sub>兼<sub>テ</sub>亦作<sub>ス</sub>三巳<sub>ヲ</sub>

時正<sub>ニ</sub>晴煦<sub>ニ</sub>養<sub>レ</sub>花天

聯步喧笑<sub>ス</sub>女<sub>ト</sub>與<sub>レ</sub>士

浴沂咏歸遂<sup>ハント</sup> 二童子<sup>ヲ</sup>一

或道<sup>ヲ</sup>芍藥將欲<sup>レ</sup>花<sup>ント</sup>

往觀<sup>ント</sup> 三水嬉<sup>ヲ</sup> 向<sup>ニ</sup> 秦涓<sup>一</sup>

吾有<sup>ニ</sup>新意<sup>一</sup> 試<sup>ニ</sup>妄言<sup>セン</sup>

與<sup>レ</sup>君殊<sup>ス</sup> 科<sup>ヲ</sup>君莫<sup>レ</sup>毀<sup>ル</sup>

吾願<sup>ク</sup> 造<sup>リ</sup> 二觴<sup>ノ</sup> 大如<sup>ナル</sup> 舟<sup>ヲ</sup>

盛<sup>ル</sup> 以<sup>シテ</sup> 二鶯<sup>ノ</sup> 泛<sup>ヘ</sup> 二前頭<sup>ニ</sup>

乘<sup>シテ</sup> 此<sup>ニ</sup> 醉中絶<sup>リ</sup> 二洋海<sup>一</sup>

直<sup>ニ</sup> 到<sup>ラン</sup> 李九門前<sup>ノ</sup> 流<sup>ル</sup> 伊勢津州隔、海、斜野、子、文、宅、在、五、鈴、川、頭

〔黄葉夕陽村舎詩〕 後篇卷六 七

(12) 三日送體園師 作舊

菅茶山

永和三日治<sup>ニ</sup> 行装<sup>ヲ</sup> 一

滿岸<sup>ノ</sup> 桃花李九<sup>カ</sup> 莊<sup>一</sup>

歸思如<sup>レ</sup> 絃<sup>ノ</sup> 侵<sup>シテ</sup> 二雨<sup>ヲ</sup> 發<sup>ス</sup>

楊林東渡晚<sup>ニ</sup> 微茫

〔黄葉夕陽村舎詩〕 後篇卷八 十四

右から分かるように、江戸漢詩の上巳詩において、常建の「三日尋

菊舎の上巳詩譜と「桃花源記」 李 夢幻

菊舎の漢詩の起句の「永和三日」と承句の「雨霽」は龍草廬の漢詩

(8)と同じ所であり、また転句の最後の字は共に「興」である。両

詩は共に永和三日の王羲之の蘭亭会の雅遊に擬え、常建の「三日尋李

九莊」の言葉「永和三日」と「雨歇」のイメージを踏まえ、常建詩の

「桃花岸」に対し、龍草廬は「桃花源記」を踏まえ、<sup>と</sup>「碧桃春」と、

菊舎は「桃花兩岸開」と常建詩の趣向を受け継いで表現した。また、

菊舎の転句の「故人」も常建詩の「故人」と同じ言葉を使った。龍草

廬詩の結句の「衛夫人」は王羲之の書道の啓蒙の先生である。龍草廬

は詩において加賀藩の女才子の小淵を衛夫人に譬えた。菊舎の「桃花

兩岸開」の兩岸の桃花は発句と同じく、「桃花源記」を踏まえた。

一・二「忘帰路」と「尋向所誌、遂迷不復得路」

菊舎の上巳吟において、「乗捨た船」、「岸の桃」の他に、「桃花源記」

の「忘帰路」のことを踏まえた漢詩が三首ある。左にそれぞれについ

てその踏まえ方を述べる。

(2) 三日遊馬場氏宅 三日馬場氏宅に遊ぶ

江水映桃花 江水桃花に映じ

流觴浮不住 流觴浮かびて住まらず

醉餘筆硯遊

醉余筆硯の遊び

似忘武陵路

忘るるに似たり武陵の路

② 帰るみちもさらに忘れて桃のけふ（菊舎）

（桃花が江水に映っており、流れてきた酒は流れに浮かんでとどまることなく過ぎていく。酔ってから筆を手にとって詩歌を書き遊んでいる。桃花源へ帰る路を忘れたようだ。）（日本語訳 李。以下同様）

俳諧②の下五は漢詩の起句の「桃花」と呼応し、「帰るみちもさらに忘れて」は漢詩結句と呼応する。

詩諧における「桃の花」、「似忘武陵路」と「桃花源記」の関係について、左に「桃花源記」の関連部分を引用する。

餘人各復延至<sup>二</sup>其家<sup>一</sup>、皆出<sup>二</sup>酒食<sup>一</sup>、停數日辭去、此中人語云、不<sup>レ</sup>足<sup>下</sup>爲<sup>二</sup>外人<sup>一</sup>道<sup>上</sup>也、既出、得<sup>二</sup>其船<sup>一</sup>、便扶（於）向路、處處誌<sup>レ</sup>之。及<sup>二</sup>郡下<sup>一</sup>、詣<sup>二</sup>太守<sup>一</sup>說如<sup>レ</sup>此、太守即遣<sup>レ</sup>人隨<sup>レ</sup>其往、尋<sup>二</sup>向所<sup>一</sup>誌、遂迷不<sup>レ</sup>復得<sup>レ</sup>路

武陵人である漁師が桃花源で何日か滞在し、家へ帰った。帰る時、所々印をつけたが、後で、人を連れて桃花源へ帰ろうとする時、帰る道を忘れたという典拠を踏まえ、菊舎は三月三日の馬場氏宅を桃花源に喩え、漢詩に詠んだ曲水の宴の雅遊の様子がまるで桃花源にいたようだと感嘆した。

我亦興來忘<sup>レ</sup>是客<sup>ナラハ</sup>

醉言相戲<sup>レ</sup>共<sup>ニ</sup>歡喜<sup>ス</sup>

或道<sup>フ</sup>旅裝春服輕<sup>シ</sup>

発句は、漢詩から語句を切り取って、漢詩でねらった焦点を示したかのようなものである。詩句のリフレインのようであり、要領の良いまとめのようでもあるが、もちろん漢詩のように説明が豊富でない分、今、ここの状況を示す単語がなく、「桃花源記」の趣を述べただけの状態でもあり、江戸時代の日本と「桃花源記」のイメージが重ね合わさる効果は発句の方にしかない。

同じ趣向の漢詩が他に二首ある。

(3) 上三日樂只菅公 三日樂只菅公に上る

紅桃三兩樹

紅桃 三両の樹

灼灼映翰林

灼々 翰林に映ず

更爲新詩美

更に新詩の美なるが為に

忘歸千歲心

帰るを忘る 千歳の心

三千とせに咲くてもふも、の花かづらかけて幾世をあふがざらめや（桃の木は二、三本そこにあり、灼灼と翰林に映ずる。さらに新しい詩がよい作品であるために。千年経っても帰るのを忘れた気持ちと同じである。）

これについては、発句ではなく和歌が付されていて、「詩諧」ではなく、「詩歌」になっている。歌は翰林菅公の三千年を寿くもので、漢詩の「千歳」に呼応している。

詩も和歌も祝儀の意味合いの強いもので、作品を作るといよりは社交のための詠作、「上る」ための詠作という性格が強いもののように

李九莊」を踏まえるのは一つのパターンであるが、さらにまた、菊舎

の(1)「三日」詩は、常建詩(5)を念頭に置きながら、龍草廬の

詩(8)から言葉を撰取り作ったように見える。

に思われる。

(4) 三日陪平松亞相公宴 三日平松亞相公の宴に陪す

千樹天天溝水頭 千樹 天天 溝水の頭

清香時入羽觴浮 清香 時に羽觴(酒杯)に入りて浮かぶ

醉來逸興忘歸路 醉ひ來りて逸興歸路を忘る

宛是桃花源里遊 宛も是れ桃花源里の遊び

③のぼりく雲の上みるひみなかな

(溝水のほとりに桃の花は咲き乱れていて、その香りは時に川に浮かんでいる盃にまで入ってくる。酔っ払って興致が盛んに湧いてきて、帰る路も忘れた。あたかも桃花源で遊んだような気がした。)

漢詩(3) 承句の「灼灼」と漢詩(4) 起句の「天天」は『詩経・

周南』の「桃之夭夭、灼灼其華」(桃の夭夭たる、灼灼たる其の華)を踏まえた桃の花の縁語である。「忘婦」、「忘婦路」は漢詩(2)と同じく「桃花源記」における漁師の最後に桃花源へ帰る道を忘れたことを踏まえる。漢詩(4)の結句に「桃花源」のイメージも直接出てくる。

桃の花が咲いていて、文人の仲間たちと曲水の宴で酒を飲んだり、詩歌を作ったりする時間は桃花源にいたように、漁師の桃花源に何日か滞在するときの「忘婦」と漁師のもう一回桃花源へ帰ろうとするが、帰る道を忘れたの「忘婦」の両方ともかけてある。

発句②は漢詩(3)の結句に対応し、発句③において「ひみな」は、

雛の節句を指すと共に、鳥が飛んで雲の上上がる意を掛けるのである。そして「雲の上を見る」雛は、菊舎が雲の上の人である平松亜相公に会うことの比喩であろう。本作もまた、平松公に奉るために作られたものなのではあるまいか。三月三日に人を讃えるためのパターンとして菊舎は、「忘婦」を便利なものとして用いたように思われる。

『詩集日本漢詩』における上巳を詠む漢詩のうち、このように「桃花源記」に因み、「忘婦」を詠んだ漢詩は少なくとも見つけることができなかつた。

以上の三対六作品のうち一対三首一句は共に「忘婦」により「桃花源記」に因むものである。上巳の曲水の宴の雅遊を桃花源に譬えるものである。

一・三 「宛是桃花源里遊」

菊舎は漢詩(4)の結句において「宛是桃花源里遊」と上巳の日、平松亜相公の曲水の宴に参加した感覚をまるで桃花源で遊んだようだと表現したが、菊舎の稿本『美濃経廻ふたたび杖』三、天明八年(一七八八)において上巳の日、榴美和尚の漢詩に似た句がある。

上巳

鬪鶏の佳節をおもへば

ただ遊ぶ鶏もよしけふの桃

朝暮園

又

紙雛や土佐が絵に見しむかし袖 同

上巳

畑人の埃りもかけずけふの桃 菊舎

宗長師亭に佳節を寿ぐとて

摘はせて茶にあらしけり草の餅 同

けふの佳節を伸べばやと神田氏へ音信、終日婦君にとどめられて

雛の間や美しい気にもてなされ 同

朝暮園即興兼而呈主人

此境皆<sup>テ</sup>桃源<sup>ニ</sup>不異

暮園<sup>ノ</sup>春色別<sup>ノ</sup>乾坤

主人自<sup>ラ</sup>是在<sup>リ</sup>ニ仙骨<sup>一</sup>

稱得<sup>イ</sup>風流秀<sup>ル</sup>事<sup>ヲ</sup>ニ蕉門<sup>一</sup>

右 榴美 （全集三七一頁）

菊舎三十六歳の天明八年（一七八八）三月、俳諧の先生である美濃の朝暮園傘狂の邸に逗留した際、上巳に同門の人々と発句を詠んだ。その際同席した榴美和尚は右の漢詩を傘狂に贈った。傘狂の邸を桃花源と同じであると賞賛した。

当時の菊舎はまだ漢詩を作り始めていないが、稿本に書き留められた榴美の漢詩は、漢詩（4）に影響しているかもしれない。

## 二 菊舎の上巳作の特徴

以上、菊舎の上巳吟から、陶淵明の「桃花源記」と関わりのある作品を取り上げて、その撰取の方法を分析した。

『詩集日本漢詩』における上巳漢詩のうち、よく詠まれたイメージとしては「周公」、「逸少」（王羲之）、「油菜花」、「桃花岸」、「門籬」、「春服舞雩」、「浴沂」、「乘蘭」、「蘭亭」、「曲水流觴」などが挙げられるが、菊舎は「桃花源記」を好んで、「乗捨た舟」、「岸の桃」、「忘帰」のイメージを詠んだ。「岸の桃」は他の漢詩にもよく詠まれたのに対し、発句の「乗捨た舟」の発想は絵画からの影響があると考ええる。また、漢詩四首のうち三首も「忘帰」と表現することから、それは菊舎の上巳吟の一つのパターンで、他の上巳の漢詩に詠まれた先例がないため、菊舎のオリジナリティとも言えるだろう。